

第4回「鉄道の日」記念 フォトコンテスト

受賞作品 および
審査委員長のコメント

平成29年9月30日

第4回「鉄道の日」記念フォトコンテスト
入賞者表彰式



●フォトコンテストの審査を終えて

審査委員長 十文字義之

10月14日の「鉄道の日」を目途に、基幹輸送としての鉄道が多くの方々に対する認識と理解、更には親しみある鉄道の在り方をPRするため、全国の各運輸局において様々な取り組みを行っています。

国土交通省関東運輸局では、鉄道事業者で構成する「鉄道の日」関東実行委員会を組織し、PRの一環として管内における鉄道を被写体とする、「鉄道の日」記念フォトコンテストを毎年実施しています。本コンテストは、多くの方々が管内で撮られた鉄道をテーマとする写真作品を一般公募し、日夜欠かすことの出来ない鉄道輸送の親しみと認識、理解を得て頂くことはもとより、写真映像を通して新たな視点と鉄道輸送に対する再認識を得て頂くものです。その暁には、受賞作品の選考発表、表彰、公開するとともに、更なる鉄道に対する原点を見つめる一つの切っ掛けとなることを願っています。

本コンテストの審査においては、十文字義之(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)を審査委員長に、竹内健蔵(「鉄道の日」関東実行委員会会長・東京女子大学教授)、古谷圭子(「鉄道の日」関東実行委員会委員長・京王電鉄広報部長)、原健人(原鉄道模型博物館副館長)、大谷英典(テレビ神奈川コンテンツ局次長)、櫻井浩志(国土交通省関東運輸局鉄道部長)を審査委員に、9月2日には291点の応募作品の中から応募規定に反する作品を除外した予備審査を行うとともに、9月6日には、2次にわたる本審査を横浜第二合同庁舎会議室において職員立会いの下、公平且つ厳正なる審査を行ったことを先ずはご報告申し上げます。

審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、審査委員賞6点、フレート賞1点、テッピー賞(中学生以下)1点、テッピーナ賞1点の計14点を選考し、以下の通り受賞者を

決定致しました。最優秀賞に輝いたのは、高丸修一さんの「バイバイ」で、JR 常磐線の勝田駅で特急ひたちを見送る兄弟の姿を捉えたもので、光の明暗を駆使した作品の中に物語があり、若い視点にはない落ち着きを感じた。審査委員一同、同氏の作品のストーリーに誰もが引き寄せられた一押しの力作でした。40 歳代から 60 歳代で占める応募者の中で、未成年者の最優秀賞の受賞は過去に例のない結果となりました。

今回寄せられた様々な視点でとらえられた作品群は、応募総数は減少したものの、昨年にも増し作品の資質を向上させる結果となりました。一方、「フレート賞」も旅客鉄道に負けない重量感を感じ、輸送という観点ではいずれも旅客も貨物も同じ眼差しで見ている光景が伺えます。また「テッピー賞」では小学 6 年生が選考されるなど、若い視点の中に観察力が垣間見れる作品が寄せられています。全体として、上位入選された作品に関して言えば、いずれも甲乙付け難いものばかりであり、最優秀賞の高丸さんの作品は、他の作品を寄せ付けないパワーがあったことは言うまでもありません。

鉄道フォトコンテストという観点で言えば、自ずと旅客輸送の視点で構成することが大方を占める一方、輸送という全体を見据えて行く中で、貨物鉄道は暮らしと産業を支える欠かすことの出来ない輸送モードであることを忘れてはならないと思います。今後撮影活動の中で旅客と貨物のモードに対して双方の眼で見据えて欲しいと願う一方、一年を通して持続継続した撮影活動を以て、来年に繋がる多くの高質な作品を審査委員一同、期待しています。

●審査総評

応募された作品の総体は、①鉄道のシンボリックな車両そのものに焦点を置いたもの、②輸送機能としての駅空間における人物との共生、③路線環境(風景)と鉄道との調和、などの作画が大方で占められ、その季節感や時空間が十分表現されている。審査委員たちは、鉄道関係や映像分野に永年携わってきた方々ばかりで、言わばその道のプロであ

る。寄せられた写真群は個々の著作者の想いが詰まっている、言わば自己表現であり、応募された全ての方々に賞を与えてあげたいのは、審査委員の誰もが思っているに違いない。一方で、コンテストという位置付けでは、作品に甲乙を付けるという作業がどれだけ辛いものか、誰もが認識している。

審査委員は、寄せられた写真群を前に、審査規定をクリアし写真映像として優れた作品である、ということはもとより、応募者個々が一人の写真作家としてとらえ、著作権者自身が主催者に対してどのようなメッセージを送り、併せて個々の鉄道に対する眼差しや考え方、主催者の意図を十分汲み取り、審査する構えとしている。

応募者の年齢別件数で見ると、男性は40歳代～60歳代のウエイトが最も高く78%を占める一方、女性は40歳代が多く44%となっている。とりわけ、昨年同様シニア層の写真熱が非常に高いものが伺える。デジタル化社会において、低年齢層でも誰もが簡単に写真が撮れる時代になり、若者世代はとりわけ写真を撮る要素と機会を備えているにも関わらず、応募者の年齢層が高い。写真そのものは撮ってもそれがコンテストに耐えられる写真なのか、コンテストという敷居の高さがネックになって、応募するまでに至らないという傾向があるのではないかと分析する。鉄道愛好そのものの世代をみると、必ずしもシニア層で占めている訳ではなく、低年齢層から年配の方まで年齢を問わないのが鉄道愛好の魅力でもある。自らとどめている写真と作品として創り上げるプロセスや責任がコンテストにおいては二極化していることが言え、応募者の平準化を図ることであれば、データでの応募や低年齢層に対するテッピ賞以外の賞設定も考えて行く必要があるだろう。

一方で、今まで少なかった女性作家の進出が確実に見えてきた。蓋を開けてみると、鉄道愛好家や写真愛好家という位置付けではなく、SNS等の電子媒体の普及も相まって、最近写真が面白くなってきて始めたとか、鉄道に対する知識がなくとも、車両のフォルムが可愛いとか、女性の視点でとらえられている作品が多い。これまで、男所帯で

あった鉄道愛好の中で、女性が新たな視点と優しい眼差しで見据えてくれていることは大変喜ばしい限りである。

このような、決して写真や鉄道愛好に対するキャリアではなく、個々の感性や写真の背景にあるメッセージ性が見え隠れするものがないと、第三者には伝わらないものがある。また、審査段階では、裏書は最終段階でのチェックでしか確認しない。あえて設定しているのに見ない、というのは何故ということであるが、必ずしもタイトルやコメントが写真と一致していないことが多いからである。タイトルやコメントは言うものの写真はそうは言っていない、ということ。作者が現場に立ち、被写体に向かった時に、これまでイメージしていた作画や思いにどれだけ近づけて行けたのか、が勝負である。しかし、現実にはそうはいかないもので、写真となると見事に覆されることも多いし、想像していたものとは別の観点でとらえられる偶然性を備えているのも写真だ。思い通りに行かないのが、写真の面白さなのかも知れない。

●第4回「鉄道の日」フォトコンテスト入賞作品

最優秀賞	「バイバイ」	高丸 修一 (水戸市)
優秀賞	「春に夕闇せまる」	濱島 康郎 (みどり市)
//	「雨色鉄道」	宮本 絵美 (横浜市)
//	「晩秋の甲斐路」	松山 進 (横浜市)
//	「反射」	土屋 直樹 (横浜市)

十文字義之審査委員長賞	「つながる鉄路」	玉村 雅美 (東京都)
竹内健蔵審査委員賞	「如月・爽快な朝」	片山 和澄 (横浜市)
古谷圭子審査委員賞	「春の海を行く」	高草木 裕子(みどり市)
原健人審査委員賞	「最後の日」	南 輝明 (横浜市)
大谷英典審査委員賞	「名月望みながら」	糸賀 一典 (柏市)
櫻井浩志審査委員賞	「お出迎え」	南部 敏彦 (和歌山県)

フレート賞	「黄昏時、山を後にして」	鈴木 智久 (東村山市)
テッピー賞	「穴を見上げる常磐線」	内田 修輔 (柏市)
テッピーナ賞	「春色に染まる」	鈴木 かおり(横浜市)

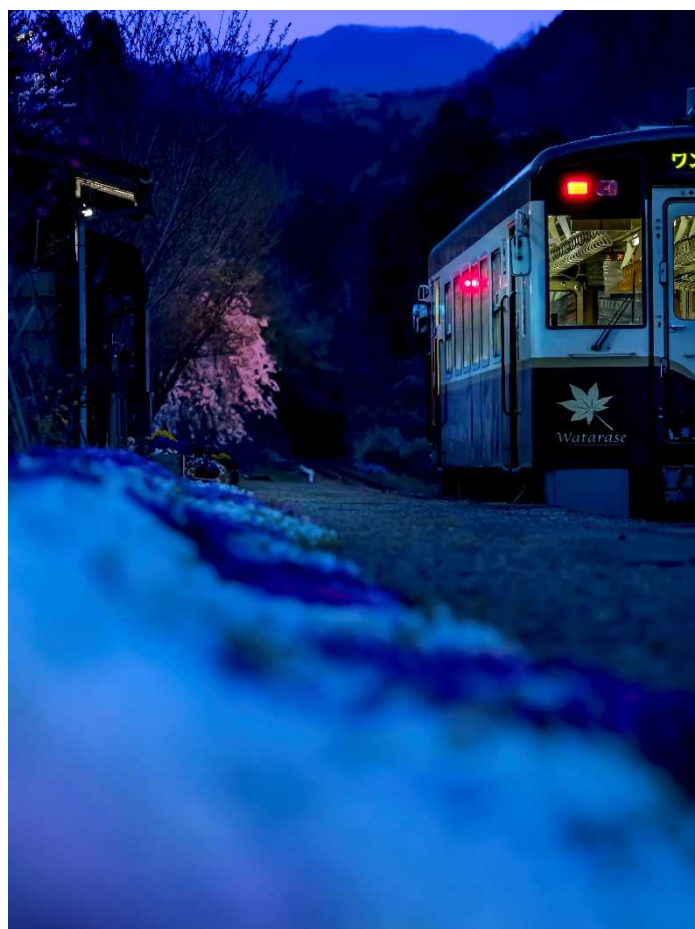
(敬称略)



最優秀賞 「バイバイ」

高丸 修一さん（水戸市）

勝田駅に到着した特急ひたち号を見送る、兄妹の姿。傍らに母親の姿が見え隠れしていることから、帰省時の光景ではないかと推測する。その相貌は、高丸さん自身の幼少期とオーバーラップする光景ではなかったのかと思う。異空間に誘ってくれる列車の確実性とその魅力に対し、被写体となった子供達の心に親しみを感じてくれたなら幸いである。映画のワンシーンを思わせるカットは、長めのレンズを駆使し、光線状態が難しいホームでのロケーションを逆手に取ったことで、子供がシルエットになった。審査委員誰もが同氏の視点に釘付けとなったことは言うまでもない。偶然にも他の乗客の姿が見えないのも不思議だが、鉄道が人々の生活を結ぶ懸け橋となっていることが十分伝わる作品である。高丸さんは写真映像に対して、写真の正しい在り方を認識している方だと思う。その反面、固定観念にとらわれず、決して借り物ではない自身の作画にチャレンジして欲しい。過去に若年層が最上位に入選することは稀で、若い感性に期待するとともに、鉄道に向き合って欲しいと願う。



優秀賞 「春に夕闇せまる」

濱島 康郎さん（群馬県みどり市）

静寂の無人駅に滑り込んだ単行車両。そして、闇の中に消えて行った。シャープネスな画質から醸し出す空気感に、審査委員一同が息を呑んだ。暮れ行くシアンの色調が静けさを倍加させ、ローアングルのスタンスと相俟って、同氏の見事な作画表現に共感した。乗客の姿は写っていないものの、この駅が地域にとって欠かすことのできない位置づけが分かる。すべての無駄を排除した作風の美しさに脱帽し、しっかり腰を据えてフレーミングする濱島さんの写真に対する正しい姿勢が、十分伝わってくる作品である。地元の方故に、今後とも季節を問わず再訪し、時の経過を活写して欲しい。



優秀賞 「雨色鉄道」

宮本 絵美さん（横浜市）

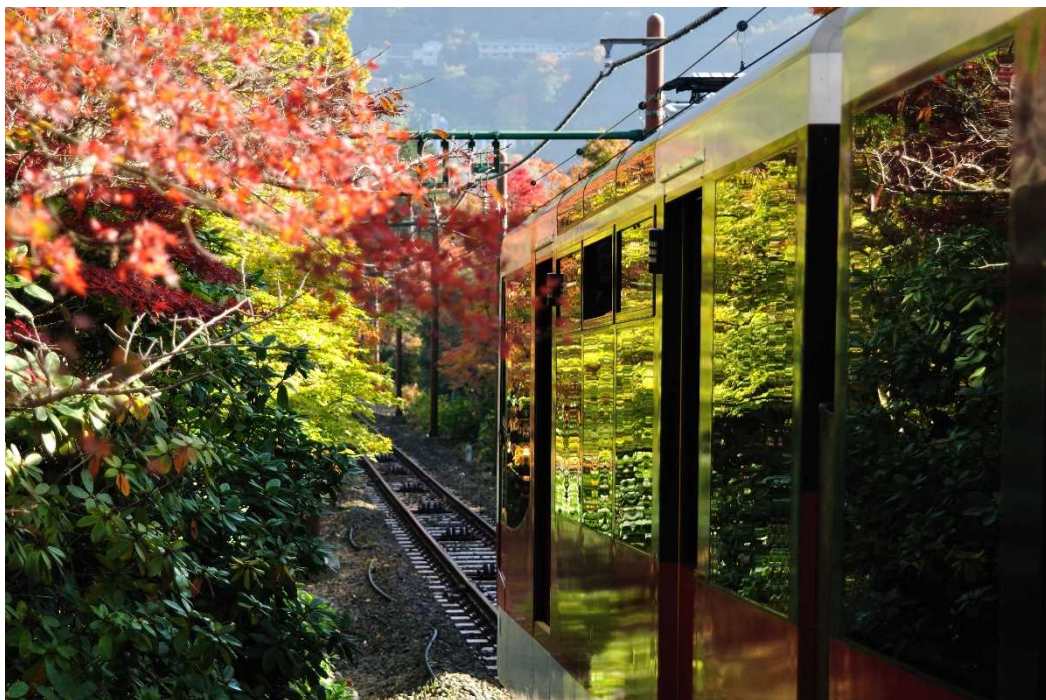
夏季休暇を利用して御岳山を訪れたものの、雨模様。雨天時は写真を撮ることに敬遠されがちだが、過酷な条件下でも、すれ違い様に上りのケーブルカーをしっかりとらえている。その手軽さは、スマートフォンの機動性ならではのもの。緑と雨の匂いが十分伝わり、軌条のてかり具合も良く、何よりフロントガラスに付いた滴が功を奏し、メルヘンチックな作風に仕上がった。正に女性作家らしいキメ細かな作品で、カラフルな車両など全ての要素が相俟って、ゆっくりとしたケーブルカーの雰囲気を一層高めている。併せて「雨色鉄道」のタイトルが実にいい。その昔、地方鉄道に存在していたような響きに懐かしさを感じる。作品とタイトルが見事に合致した優しい宮本さんの感性に共感した。



優秀賞 「晩秋の甲斐路」

松山 進さん（横浜市）

南アルプスを背景に晩秋の甲斐路を行く2連の気動車。ゆっくりとカーブを描いて迫り来る先には、ススキが斜光を浴びて輝いていた。これほど見事に風景と列車が同化している作品は少なく、遠近感も申し分ない。ベテラン作家故の松山さんの安定感や色彩のグラデーション、作画の遠近感が絶妙で、安心して観られる作品だ。このフィールドが同氏にとって絶好のロケーションであることも分かる。小海線が優しい秋色の風を運んで来てくれそうな予感がする、いい作品である。



優秀賞 「反射」

土屋 直樹さん (横浜市)

紅葉真っ盛りの箱根、箱根登山鉄道鋼索線の公園上駅に佇むと、鏡と化した新車両の側面に映し出された紅葉のコントラストが素晴らしい。映り込みは、角度や天候にも大きく左右されるので、土屋さんの視点とその判断は正解である。プロジェクションマッピングを思わせる映し出しは見事で、肉眼と映り込みのコラボレーションが異空間に誘ってくれる不思議な作画となった。秋を彩るロケーションと鉄道との共生が上手く表現されて観光路線の特徴を最大限に引き出した作品である。



十文字義之 審査委員長賞 「つながる鉄路」

玉村 雅美さん（東京都）

単線の地方鉄道の駅相貌を俯瞰でとらえた作品に、規則正しい鉄路の信頼を感じる。Y分岐で配した対面ホームの交換駅に入線する光景にゆっくりとした時の流れを感じ、定時、安心、安全の鉄道輸送の優位性を再認識するいい作品である。さりげなく入れたシグナルも効果的だった。長玉のレンズ選択と使い方も巧みで、同氏の作画に対する熱意も感じられた。毎日、時間になると繰り返す同じ光景ではあるものの、改めて写真にした時に鉄道の再認識と理解が得られるものだ。



竹内健蔵 審査委員賞 「如月・爽快な朝」

片山 和澄さん（横浜市）

早起きは三文の徳という言葉通り、チャンスは付いてくる。写真に携わっていると、自らの心構えからチャンスが向かってくることがよくある。風景写真であれば尚更、天候や環境条件を調べて撮影に臨むことは当然で、そのプロセスこそが良質な作品を創る鍵となる。片山さんは、こうした条件を認識し、あとは現場の状況判断で自らの物にする意気込みが感じられる作品だった。季節でも日の出の時間も違い、昇る位置も異なってくる。上手く、列車の時間とリンクすればよいが、中々そうは行かないのも写真だ。キリッとした冬の早朝の光景も良く表現されているし、あらゆるコンディションが合致して、気分も爽快といった所だろう。



古谷圭子 審査委員賞 「春の海を行く」

高草木 裕子さん（群馬県みどり市）

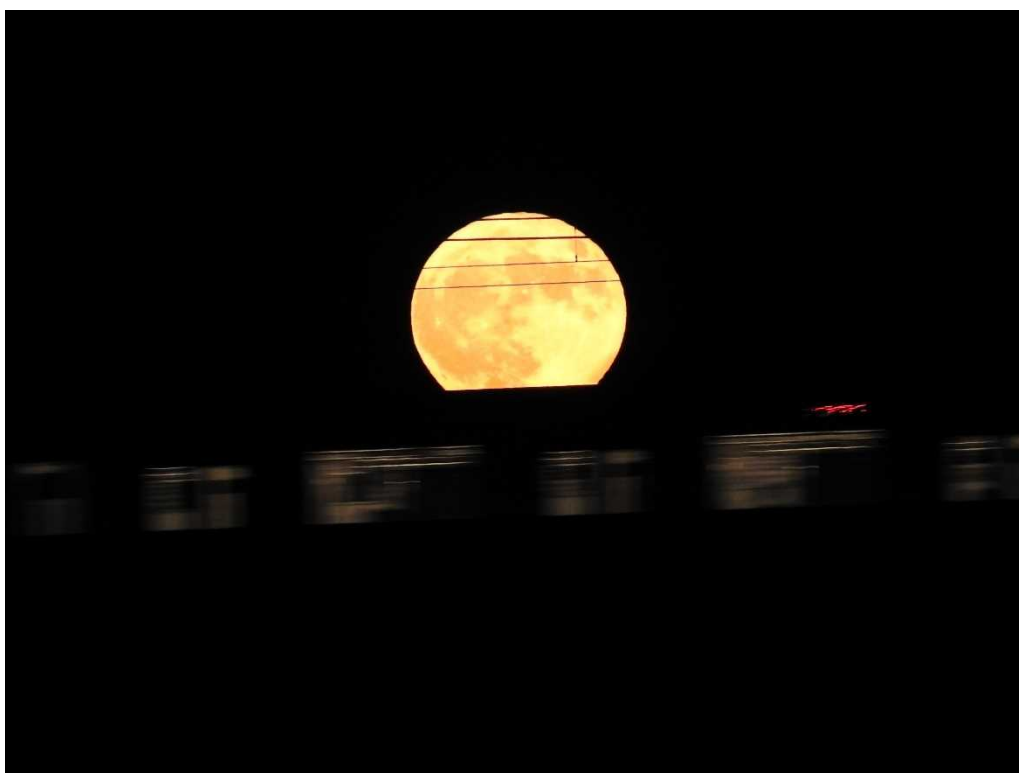
わたらせ渓谷鐵道の上神梅～大間々を行くトロッコ列車。沿線の恵まれた環境から本コンテストでもテーマとして応募が多い。とりわけ、同区間は、愛好家御用達のベストショットが狙えるスポットでもあり、桜のシーズンには多くのカメラマンが訪れるという。高草木さんは、そのような定番のスポットから少し移動して、アングルを変えることで自らの作画で表現した。桜の海原を駆け抜けて行く朱のDLとのコントラストが絶妙で、沿線環境との融合が素晴らしい。同氏には自ら足で稼いだとおきの撮影場所を見つけて作品のオリジナリティーを提供して欲しい。



原健人 審査委員賞 「最後の日」

南 輝明さん（横浜市）

出会いがあれば別れもある。車両の置換えに伴い永らく従事した老車が引退した。強羅駅を後にした最後のシーンでは、車掌に花束が贈られたようだ。その花束を乗務員室の中央に、労をねぎらうように捧げた光景が分かる。これ以上無駄のない、大胆なフレーミングは、伝えたいことをストレートに表現している所に好感が持てる。南さんのやさしさと車掌の優しさが伝わるいい作品になった。



大谷英典 審査委員賞 「名月望みながら」

糸賀 一典さん（柏市）

夜の利根川橋梁を渡る、つくばエクスプレス。TXの背景には満月が浮かび、神秘的な光景となった。土手から捉えたものだと思うが、糸賀さんは的確且つダイナミックに表現されている。下部が列車に遮られた形状も面白いと思う。列車内では見逃しがちな風景も、外から冷静に見ると、見えて来るものがある。欲を言えば、TX特有の車体の質感がもう少し表現できたらと悔やむところだ。機会あれば季節毎に再訪し、ベストショットにチャレンジして欲しい。



櫻井浩志 審査委員賞 「お出迎え」

南部 敏彦さん（和歌山県岩出市）

森林から顔を出すと案山子たちの歓迎を受ける小湊鐵道。田んぼを彩る緑のカーペットに朱とアイボリーの塗色とのコントラストが絶妙にマッチしている。南部さんの作品には、地域鐵道が沿線住民に守られている証が表現されており、マイレール意識の向上が十分伝わってくる。毎日の利用者はもとより、線外者へのおもてなしの姿勢が嬉しい。現場の制約もあると思うが、違うスタンスで、案山子の表情が分かる作画も見たい。



フレート賞「黄昏時、山を後にして」

鈴木 智久さん（東京都東村山市）

今日も一日が終わろうと、夕暮れ時に燃料輸送の貨物列車が駆け抜けて行った。色温度が高いシアンの色調に夕方の匂いを感じられ、産業と暮らしを支える鉄道貨物輸送の使命感を感じずにはいられない。迫り来る背景の山々も良い雰囲気を出して、一層の空気感を醸し出している。併せて、踏切に見え隠れする女性の姿も効果的ではないか。今度は手前のカーブもダイナミックに入れて躍動感溢れる作画にチャレンジして欲しい。



テッピー賞 「穴を見上げる常磐線」

内田 修輔さん（千葉県柏市）

親しみある地元駅で撮影する内田さんの愛着が込められた1枚である。跨線橋から撮影に臨むものの、防護壁が邪魔をして撮れない。しかし、一部腐食した穴からレンズを通せば、E231系と目が合った。タイトルの面白さも相まって、審査委員が妙に納得してしまった作品である。鉄が朽ちる美しさと精鋭的な車両との二極化が独特な雰囲気を出している。作者は小学生でありながら、三度の飯より鉄道が大好き、という思いも十分伝わり、若い感性に心からエールを送りたいと思う。今後とも、足で稼ぐ自身のベストロケーションを探して活写して欲しい。



テッピーナ賞 「春色に染まる」

鈴木 かおりさん（横浜市）

菜の花の向こうには、駅を後にする列車の姿。黄色一色に染まった何ともメルヘンチックな写真で、同賞に相応しい作品であった。鈴木さんの女性ならではのキメ細かさと優しさは男性にはない空気感を表現し、麗らかな一時を感じさせてくれた。菜の花の切れ間から顔を出している車両への眼差しは、列車を見届け送り出すプロセスが十分理解できる。同氏の写真に対する心構えもさることながら、この作品の優しい眼差しは他の写真には見られなかった鈴木さんならではの世界観がある。